

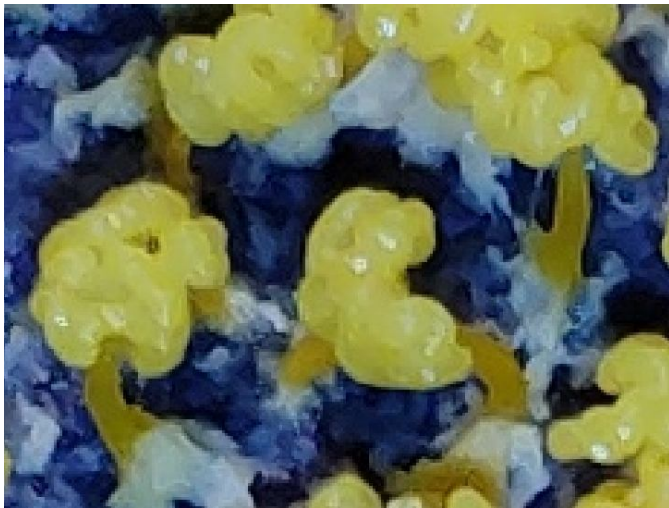
「モジホコリの実験 (12)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

モジホコリの変化体は、細胞膜や細胞壁による隔たりのない、一つの細胞の中に、多数の核が散在する「多核体」である。しかし、生殖器官である子実体を形成する時は、短時間で細胞の分化が起きる。



写真は、形成途中の子実体である。短い柄が見え、その上のついているのが「孢子囊」である。この段階で孢子囊内部では減数分裂が起き、短時間で大量の孢子が形成されている。



孢子囊は成熟すると、数時間で真っ黒になる。モジホコリの培養に慣れていない人は、これを見て「カビが発生して失敗した」と勘違いをすることが多い。しかしこれはカビではなく、モジホコリの実体そのものである。やや拡大してみると、何か凹凸のある小塊であることがわかる。ここは顕微鏡の出番である。



このような観察対象を観る場合、透過光は無効で、反射光のほうが良い。40倍で観察すると、その正体が見えてきた。孢子囊がいくつもかたまっている。



成熟した子実体にも「柄」が残っている。キノコと同じで、少しでも背を高くして、孢子の飛散を助けようとしているのだろう。



更に倍率を上げると、子実体(孢子囊)表面の模様も出てきた。この模様が「文字」のように見えるので、モジホコリという和名になったのだろうか？